

第24回 神奈川県小学校教育研究会社会科部会「川崎大会」 県小社授業研究会 4年部会提案

川崎市小学校社会科教育研究会 研究主題

ともに生きる未来を創造し、よりよい社会の在り方を問い続ける社会科学習

R7年度 研究の重点

深い学びの実現に向けた一人一人が生きる社会科学習

4年部会が目指す子どもの姿

主体的に学び続け、社会の仕組みやつながりを理解し、社会の一員としての自覚を高める子

4年部会では、「深い学びの実現に向けた一人一人が生きる社会科学習」を本単元で具体化するために、下記の3つの視点を設定し、実践に取り組むことにした。

視点① 学びを追究する単元づくり

視点①-A 複数の事例を扱う単元構想

「深い学びの実現に向けた一人一人が生きる社会科学習」の具体化に向けて、本単元では久地小学校の子どもたちにとって身近な「地震災害」と「風水害」の2つを教材化し、事例として扱う。関東では今後予想される地震の情報が報道され、子どもたちは地震に対する危機感が高まっている。また、久地小学校は多摩川の近くに立地し、台風による洪水への危機感もある。だからこそ、2つの事例を扱うことに意味があると考えた。そして、「地震災害」と「風水害」への対処と備えを比較・関連・総合しながら学ぶ学習過程を設定した。

本単元では『自然災害から人々を守る活動』について追究していく。複数の事例を比較・関連・総合することを通して、異なる災害でも人々の連携や協力による対処や備えがあるという共通点を捉えることができる考えた。また、災害の種類によってとるべき行動や備えが異なってくることも捉えられる。このように、自然災害の複数の事例を扱うことで、より単元目標を本質的に把握することにつながり、概念的知識を獲得・活用できるのではないかと考えた。

また、事例を選択できるようにすることは、研究の重点でもある「一人一人が生きる社会科学習」にもつながっていく。自分にとって興味・関心がある事例を選択できることで、より「自分事の学び」へとつながっていく。自らが選択した災害について追究し、異なる災害を追究した子どもたちと調べたことを共有したり、学び合ったりすることを通して、一人一人が生きる学びへとつながることを期待したい。

視点①-B 単元目標に迫る問いの設定

学びの原動力となり、単元目標に迫る問いを設定することは「深い学び」の実現に向けて重要だと考えた。そのために、本単元では下記の要素を含む問いを「単元の問い」として設定した。

★必要感・切実感があり、選択・判断に向けて追究できる問い

- 自分たちの生活に直結し、単元を通して追究していく価値があるもの
- 正解が一つではなく、学習を根拠に自分なりの結論を導き出す必要があるもの

単元の問い

視点② 子どもたちが主体的に学び続けるための環境づくり

視点②-A 自ら資料を収集・提供できる学び

子どもたちの主体性を発揮できるようにするために、年度初めに社会科の年間の学習内容を子どもたちと共有し、見通しをもって学習できるようにした。

子どもたちが年間の学習の見通しをもつことは、社会科の学習を点ではなく線や面で捉えるために必要だと考えたからである。また、年間の見通しをもつことで、教師の資料提供のみによって学習が展開されるのではなく、事前に子ども自らが探したり獲得したりした資料を生かし、学習を展開できるのではないかと考えた。

子どもからの資料提供については、単元導入前と後では、役割や質に違いがある。

【単元導入前】

子どもたちの素朴な疑問や興味・関心を引き出すもの。個人的な経験や関心に基づいた資料を持ち寄るため、断片的かつ主観的な資料が多くなる。必ずしも単元の内容と直接関連しないこともあるが、教師が子どもの主体性を認めることで学習意欲を高めることができる。

【単元導入後】

子どもたちは問いの解決に向けて、根拠となる資料を意図的かつ系統的に収集・活用していく。問いの解決になるように、より客観的で信頼性の高い資料の提供が多くなる。教師は子どもからの資料提供を適切に見取り、活用していくことで、協働的な学びにつなげたり、問いの解決に向けて主体的に取り組む態度を育成したりすることができる。

このように、年間の見通しをもち、資料提供することは、学習の主体性を育むだけでなく、情報を集める技能や情報を活用する技能も身に付くのではないかと考えた。

視点②ーB 自らの学びを選択できる教室環境

子どもたちが主体的に学び続けるためには、学びの教室環境を整備することが大切だと考えた。一人一人の興味や関心・必要感に応じて資料や支援、自分に合った学習方法を自ら選択できるように教室に多様な場を設けた。具体的には、

- (1)多様な資料から調べ学習ができる場
- (2)インタビューできる場
- (3)これまでの学習を掲示物などで振り返り、説明し合える場
- (4)調べたことを友達と交流できる場

教師はファシリテーターとして個々の学習の状況を適切に見取り、個に応じた助言や支援を講じたり、個人で追究したことを全体で共有したりする機会を設けていく。

視点③ 学びをつなぐ

◀「小・中学校社会科における内容の枠組みと対象」学習指導要領解説社会科編 P150～

枠組み		地理的環境と人々の生活		
対象		地 域	日 本	世 界
小学校	3年	(1) 身近な地域や市の様子 イの「仕事の種類や産地の分布」		
	4年	(1) 県の様子 アの「47 都道府県の名称と位置」 (5) 県内の特色ある地域の様子		
	5年	(1) 我が国の国土の様子と国民生活 イの「生産物の種類や分布」 イの「工業の盛んな地域の分布」 (5) 我が国の国土の自然環境と国民生活との関連		
	6年			

	土地の様子と人びとの生活	社会の仕組みやはたらきと人びとの生活	れきし
3年生	身近なちいきや市の様子 (久地のまちや川崎市の学習)	地いき にみられる生産やはんばいの仕事 (日本理科学工業「チョーク工場」) 地いき の安全を守る働き (事件、事故 火事の学習)	川崎市の
4年生	県の様子 (神奈川県)の学習 県内の特色ある ちいきの様子 (箱根町、三浦市、横浜市)	人々のけんこう や生活かんきょうを支える仕事 (水 こみの学習) 自然災害から人々を守る活動	神奈川県内の (小田原城、平
5年生	日本の国土の様子と国民生活 日本の国土の自然環境と国民生活	日本の農業や水産業 (米づくり 漁業) 日本工業生産 (自動車づくり) 日本の情報と産業との関わり 日本の国土と自然環境と国民生活との関連	
6年生		日本の政治の働き グローバル化する世界と日本の役わり	日本の

子どもたちと社会科の系統を共有

「社会科 学びのつながり表」▶

「深い学び」の実現のためには、単元がぶつ切りにならないように「学びをつなぐ」ことも大切である。そのために、子ども自身が社会的事象の見方・考え方を繰り返し働かせることができる単元構想にした。社会科の「見方・考え方」を継続的に繰り返し働かせるために、「社会科 学びのつながり表」(「学習指導要領解説社会科編 P150～151 小・中学校社会科における内容の枠組みと対象」を子どもたちの言葉に直したもの)を配付し、活用している。

「学びのつながり表」は、各分野のつながりや各学年で学習する内容がどのように関連しているのかといった縦と横の系統を示している。社会科の系統を子どもたちにも意識できるようにすることで、本単元でもこれまでの学習で働かせた見方・考え方を働かせ、「～の時と比べると、～と似ていて今回も～、どちらも共通しているのは～」と、比較・関連・総合して思考できるのではないかと考えた。このような手立てを講じることで、各単元の単発的な学習に留まるのではなく、既習単元と関連付けて考える力を身に付けることができ、社会科の本質的な理解をより深めることにつながっていくと考えた。